



Title	シベ-ルとアチス F.Mauriac の異教性()
Author(s)	中島, 公子
Citation	明治大学教養論集, 272: 21-39
URL	http://hdl.handle.net/10291/12308
Rights	
Issue Date	1995-01-20
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

シベールとアチス

F. Mauriac の異教性 (II)

中 島 公 子

12) シベール、時を待つ

まだ、何も起こらない。

シベールはじっと我慢している。

目をお瞑り、シベール、さもなくばこの場を去れ!

おまえには、これはあまりに辛かろう。サンガリスの手は

羊飼の額にほどける野生の髪をかきあげ

その小さな唇は 火と燃える顔の上を

とどまらずに ふらふらとさまよう。

おまえは耐える、この臥床からもれる吐息

おまえの闇と天空を嘲笑う叫び声を⁽¹⁾。

では、シベールは負けたのだろうか。神々の母であり、生けるものすべての命の与え手である全能の女神が、幼いニンフ風情になすところもなく敗れたのか。そんなことはあり得ない。

アチスは自分が何をしたのかに、早晩気づくはずだ。自分のしたことが「罪」であること、「快樂」の向こう側にひろがる虚しさを悟らないはずがない。そしてそうなることを、神であるシベールは知っているのである。

だが、おまえは知っている、星々を燃え上がらせるこの火が

ときには 人間や獣たちの秘密にふれて 絶えることを。

快楽が 汚らわしいからだの火を 消すことを。

とまどいながら アチスが 道を外れた己が行いから抜け出し

深淵をよじのぼり その果て 暗い獣毛の下に鳴る

心臓の鈍い鼓動に耳を傾けることを⁽²⁾。

だから、シベールは待つ、復讐の時を。アチスが、シベールの最愛の子として、また至高の恋人として、彼女の手にもどってくる時を、じっと待っているのである。

13) 罪のあとのアチス

アチスはシベールの憤りを逃れるため、サンガリスのもとを離れ、伝説にしたがって、葦のしげみの中を彷徨する。そのアチスに、罪の意識が襲いかかる。悔恨に身を焼くアチス。古代ローマのシベール祭祀においては、アチスの役割を演じる祭司の若者たちが、高揚する祭りの頂点に、狂乱状態に陥り、我と我が身の男根を切り取って去勢するという行為に出る。シベール祭祀の特徴ともいうべきこの行為は、詩のなかで、いま直接には語られないが、悔恨がそこまでアチスを追い詰めるであろうことを、二行目の「己が身を引き裂き」が暗示している。悔恨に責められつつ、まだ罪の魅力を諦めきれない、迷うアチスがここにいる。

葦のなかで 堪能したアチスは 草をかきわけ 道をつくる。

そこで 己が身を引き裂き、泣くニンフを残して 逃げる。

遠く、憤怒の雷鳴をとどろかせ、身をほてらせて、シベールは待ち

獲物を手放したアチスのまわりを 巡り歩く。

子供の眼差しから汚れた喜びの色は消え

魂が命を取り戻してゆく この未だ混濁した空色の眼は

風に清められる 嵐の空だ。

しかし 睫毛のしたに まだ濁れる水は まどろみ
熱と 疲労と 策略の秘密が 眠っている⁽³⁾。

14) アチス、松の木に変えられる

アチスの悔恨にくれる姿をみて、シベールは手をくだしてアチスを松の木に変える。「人間=動物」から「松=植物」への転換は、去勢による獣性の喪失を意味する一方、大地のなかにしっかりと根を張る樹木とすることによって、アチスを完全にシベールの所有物とすること、永遠にシベールによって生命を保たれる存在とすることを意味する。

わたしは あまりに 長いこと 苦しんだ
人間どもが 短い死を味わう あの抱擁の腕を ほどこうとして。
恐れもなく ころゆくまで おまえを抱くために
おまえをこの「木」に変えた、そして 後悔などしまい！

嫉妬するふりをしたのだ、アチス、まやかしをもって
天の神々を演じたことを わたしはむしろ誇る
緋色の樹液の熱く通う 人間大木となった
おまえの脇腹に 樹脂が 蜜のように 流れるように、と⁽⁴⁾。

しかし、ここでシベールの予期せぬことが起こる。

「木」となったアチスは、全面的にシベールのものとなったわけではないのである。根をシベール（大地）のなかに張りつつも、松は大気のなかに広々と腕を広げる。その眼差しは地面にではなく、高く天空に向けられている。シベールでもない、サンガリスでもない、別の「神」を求めているのである。

神性に牽かれ 聳え立つ 若い松は
長い手を泳がせて 天空に 印を刻み
頂きは ある神を 捜し求める、が、そのゆるやかにのびる 根は
わたしの暗いからだのなかに ゆっくりと道を掘る⁽⁵⁾。

シベールの支配から抜け出そうとするアチスのドラマは、木に変身しても終わりを迎えず、むしろここにもっと高い次元に向けて新たに始まるのである。天と地に引き裂かれていくアチス。これを見て、シベールはとまどう。

地上を吹く風という風に 空しく髪をそよがせ
おまえののぞむ神を掴もうと 手をのばすがいい！
でも 決して 何物も おまえの深い根を
快樂にしびれるわたしの大きなからだから 引き抜くことはできぬ。

どこか一隅に われわれの神々の知らぬ 清らかな愛を隠す
青空にむけて おまえがそそり立てば立つほど
わたしが閉じ込めた わたしの肉体の闇のなかで
おまえの深い四肢は その罪を享受するのだ⁽⁶⁾。

しかし「木」であれ「人間」であれ、被造物である以上、命はいつか終わりの時を迎えなくてはならない。次に現れるのは「アチスの死」である。それは〈未来形〉で語られてはいるものの、ここでシベールがアチスの「屍」について具体的に、長々と語ることに注意する必要があるだろう。ということは、先程の「去勢」の場合のように間接的な方法で、〈未来形〉は、現実の「アチスの死」を暗示しているのである。

そしてシベールはその「死」をも利用して、アチスを自分のものとしようとする。大地はすべてを飲み込んで消化し、腐敗も解体も恐れない。むしろ死し

て朽ち行くものこそ、「土」であるシベールの独占する領分なのだ。

しかしシベールがひきつけられる永遠は まことはつかの間にすぎぬ
どんな抱擁も 神々が望むときに 終焉を迎えてきた
人間、木、樹液、血、あるいは粘りつく樹脂
いつの日か 燃える河よ おまえは流れるのをやめるだろう。

世々の終わりまで わたしは抱いて行かねばならぬ。
ミツバチや蟻に食い荒らされながら 立ちつくすアチスを
おまえの根は そのとき 死人の髪となり、
わたしの心臓の上にとぐろを巻いて永遠に眠る 蛇となろう。

腐敗をよせつけぬ 香わしい蛇たちは
アチスの屍に わたしの運命を からませる
この枯れた木を わたしの挑戦する神々に さしだし
枯木のまわりに わたしのすべてを 結集する

わたしの葡萄畑、わたしの森、わたしの貪欲な敵は
炭化するこの体から 光線のように 四方に放射する。
天の星々は この裸の礎柱を 夜空に探し
まるで神々の一隊のように これをめざして 歩み続ける。

そして わたしだけが、おお 羊飼よ 黒い柱よ
葉を戦かせる 優しい人の樹よ
おまえの糸まともぬ屍のうえに、どんな猛々しい鷲が舞い降り
樹皮に爪をたて おまえを血に染めるかを 知っているのだ……(7)

15) 無数のアチス

シベールが予期しなかったことは、アチスが天空に別の神を求めたことだけではない。死を迎えたアチスが再生することである。この箇所は「蘇るアチス」を語っている。それは植物の再生の形で語られるが、生まれ出るのは人間アチスである。

枯れ朽ちて行く松から新芽が出、細い枝を張り、伸びて行くように、シベールの見覚えのない、しかしまぎれもないアチス、新たな少年アチスが姿を現す。それをシベールは驚きとともに見守るのである。

わたしがとじこめたと思った この樹皮を 逃れ
わたしがあの木に変えたはずの子供が わたしの目の前にいる
かばそい体をして 森の闇から 浮き出してくるのが見える
肩には 雨の滴が光り
裸の足の下で わたしの砂はむなしく身を開き
やさしいからだをふたたび覆う鱗も そのまま落ちて
長い溝伝いに 若い松よ 血が流れる
見知らぬアチスが この森の暗がりから
そこに姿を現している。この森のどの松も
わたしに不実だった眠るアチスを隠しているのだ。
人間の森に もうひとりのアチスを加えよう、
そして年齢から年齢へと わたしのあとを追う子供は
来るたび 清らかな野生の瞳で わたしをみつめ、
わたしから 彼自身の秘密を 聞き出そうと 待ちうける⁽⁸⁾。

「この森のどの松も」というところに注意しよう。この新たなアチスの数は増え続け、広大な湿原に林立する松となる。同時にそれは闘争する青年の肉体となって、次の「アチスたちの戦い」を演じて行くのである。

16) アチスの戦い

広げられた枝（腕）と枝（腕）が激しく擦れ合い、搏ち合って倒れて行く。たしかにこれはアチスたちの、つまり松と松の闘争である。しかし何のために、何を目的としての戦いなのか、それはまったく語られない。「松」はもはや言葉を失っており、大地であるシベールもまた、材木として伐採される木を受け止めるように、倒れる少年の体を受けとめ、自分の上に寝かせることしかできない。

この無言の戦いはシベールの関与できないところで行われているのである。それは複数のアチスたちによって戦われる、アチスひとりの内面の戦いなのだ。異教の神がはいりこめない、魂の領域が戦場なのである。

わたしが愛した松たちは 残酷な少年や
殺戮された子供のトルソとなり
並び合って 次々とわたしの上に倒れる
血の薫りと樹皮の匂いに包まれながら。
もはや動かぬ唇、傷に開いた脇腹が
かわるがわるわたしを求め、わたしはその一人一人を見まごうことはない
おお、清純なアチスの乳房、おお、ふくらみのない胸よ、
からだのなかでここだけ清らかな、戦く、荒涼たる空間
矢に貫かれた 踏み込めぬ心
おお、いばらとひいらぎに傷つけられた臍よ、
おまえたちから流れ出す緋色の川水を 飲まなくてはならないのか
夕立の冷たい水にしか渴きを覚えぬ このわたしが⁽⁹⁾？

前回「シベールの賛歌」で触れたことだが、この「無数のアチス」「アチスの戦い」に出てくる複数のアチスは、かつてのシベールの恋人たちに呼応して

いる。シベールはそこに失った恋の対象を捜し求め、いとおいしい若者の蘇った姿を見ようとする。だが、シベールの上に倒れる鮮血にまみれた彼らはシベールの恋人ではない。「わたしを求める」とは言っても、それはシベールの上に横たわり、傷ついたからだを憩わせるためであって、彼女から官能の喜びを得るためではない。シベールの知らない「矢」に貫かれた心は、もはや彼女の侵入を許さないのである。死によって永遠にアチスを得るはずであったシベールは、蘇ったアチスによって、もう一度イポリットに拒絶されるフェードルの悲しみを味わわなくてはならない。しかもこのイポリットの心を占めているのは、ニンフでも人間の女でもなく、シベールの知らない「神」なのである。

このアチスの変貌、植物への変身=死、これについて現れる精神の変容、魂の「新生」が、異教からキリスト教への移行であることは、次の詩編において明らかにされる。

17) キリスト者アチス

だが 最後に来た者がシベールの上に横たわっても
その者は誰か女の名を 口にするのではなく
その手は この場にはない肉体の影を求めはしなかった。
ひっそりと 清らかに 若い血潮は流れ
潰された葡萄の房から 欲望はすべて逃れ去っていた
暗いからだと火のような土との間で。
これは同じ子供、しかし別のアチス
青空に憩うあの松たちの誰とも違う。
かりそめの命をやどす者の心には ひとりの「神」がいて苦しんでいた。
羊歯が斑に影をうつし
固い土がその火照りをもって焼く このトルソの中には
シベールが恐れる神、血にまみれた神がいて苦しんでいた⁴⁰⁾。

「シベールの賛歌」に呼応して、「最後に来た者」つまり「アチスの中のアチス」が主題となっているが、その心に潜む「血まみれの神」とは誰であろう、十字架上のイエスである。アチスは自分の苦しみと死をイエス・キリストの受難と死に重ね合わせる。こうしてキリスト者アチスが「血」を流しつつ誕生するのである。

18) シベール、異教徒アチスを懐かしむ

この一聯は内容上二つの事柄を語っている。前半というより冒頭ではたしかに、シベールは新たに誕生したキリスト者アチスを題材にしているが、そのうち過去の、異教徒アチスの思い出に移って行く。そして後半、「罪のあと」から「松の木に変身させられる」まで、暗示的にしか語られなかった時期のアチス、その去勢から死にいたるまでの行動が、ここで具体的に描写されることになる。かつてアチスの死が、〈未来形〉で語られたように、ここで異教徒アチスは〈過去形〉で語られる。そしてこの〈過去形〉には重要な意味がある。異教徒アチスははっきり過去のものとなったということである。

言い換えれば、シベールはアチスを永遠に失ったのだ。だから、その暗い時期のことを回想して、シベールはアチスを「懐かしむ」のである。

その子に近づく勇気がない、とシベールは言う。

わたしは肉体は愛するが、不滅の魂は愛さない。

彼の神の「恩寵」は 水のように彼を包む。

この新たなアチスの透明さ そこに

わたしの見知っているおまえは なにひとつ残ってはいない：

おまえの巻き毛、低い額、厚い唇、

イダ山の雪の上 あの神々の暁の光のなかで

シベールがわがものとした 優雅なフリュギア人アチス

老人たちの海からは 放逐される 二心の持ち主
追放された雄のからだにやどる やさしい女人
そうだ、あり得ない宿命を手に入れようと
シレックスの刃で、我が身を切り裂く者。
乾いた土は 嵐の重たい水滴のように
去勢された青年の流す 黒い血を飲んだ。
バッカスの巫女たちは 高笑いとお高い叫びをあげて
その鮮血の足跡の上を 走った。
そして一番若い娘さえもが その歯を
葡萄棚からもいだ黒い人間の房に 近づけた。
垂れ込める空のもと おまえが汚した砂地を
哀れな心よ、汚らわしい傷をかかえて おまえは逃げた。
漁師の子らは 投石機をかまえて
深手を負いつつまだ死にいたらぬ その肉を おびやかした。
おまえはひたすら逃げた。一足ごとに、アチスの濁った血が
点々と地上に種を蒔いて行くのも知らずに⁽¹⁾。

ここには、傷ついたアチスを襲う苛酷な迫害が語られている。彼に投げ付けられる石、それは神々の怒りを蒙った者への、異教世界全体から投げ付けられる軽蔑であり嘲りであるが、それと同時に、異教世界を抜け出そうとする者への集団的憎悪でもある。我と我が身を傷つけたばかりでなく、石に打たれて転びながら逃げ惑うアチスの姿は、ローマ時代の初代キリスト教徒の受難と、そのときに流されたおびただしい「血」をも暗示している。

19) 恩寵に満たされるアチス

この部分は『アチスの血』の最終詩編であり、結論でもある。

一口にいえば、前から引き続いて「再生したアチス」すなわち「キリスト者

アチス」をうたい、その「賛歌」を奏でて詩全体を締めくくるものだが、その前に異教徒アチスを懐かしむシベールは、まずはなんとかして昔の恋人をそこに蘇らせようとするのである。このシベールの空しい努力を追って、詩そのものは眠るアチスに戻り、無数のアチスを呼び、死を思い、サンガリスまでもおびき寄せて、全体として「アチスの血」のドラマの回想、総決算といった性格をおびる。こうして過去によってなぞられることによってアチスは、かえって過去との違いを明確に現して行く。「新しきアチス」のイメージが、詩のなかに浮き上がってくるのである。

それは「滅びるもの＝肉体」を克服した「永遠なるもの＝魂」の勝利である。アチスの戦いは終わった。しかもそれはアチスがひとりで得た勝利ではない。“小羊”も“子”も「キリスト」の別名であることは誰にも知られている。アチスはシベールの、つまり肉の支配を脱して、“子”のもとに赴き、その庇護のもとに魂の安息すなわち“平和”を得た。キリスト降誕のとき羊飼いだけが耳にすることのできた天使たちの合唱「天にはいと高きところに神の栄光、地には善意のひとつに平和あれ」の「あの“平和”」であり、これが「恩寵」である。そしてシベールの異教的世界が、神を見つめつつ立ち上がる無数のアチスたちのキリスト教世界のなかに融解して行くことをもほのかに暗示して詩は終る。

これはもうあの昔のアチスではない。

おまえの神は、猛々しくも優しいかの怪物からおまえを解き放った、
消えない火をおおう灰として必要なだけを　そこから残して。

そしてわたし、シベールは、この火がはぐくむ心のまわりを
呻き　ためらいつつ　雌狼の歩を　さまよわせ

そんなにもかほそく　そんなにも強いおまえをみて　涙をこぼす。

おまえはまた眠るかしら？　しとねの草の汁に汚れて。

夢のなかのように　鳥はうたう嘴を閉じ、

蟬は おまえの血の脈打つのにあわせて羽ばたく。
松林が火と燃える海の国から吹いて来て
しおれる菩提樹の花の間に息絶える南の風は
サンガリスの肌の匂いを おまえに運ぶ、
憎いライバルに助けを求めて。
おまえが愛でいつくしむものに 夢の中でおまえを引き渡そうと
わたしはかつての日の火炎を おまえのうえに封じ込める……
でも、駄目！ 膝を僅かに粘土で汚しただけで
おまえは立ち上がる、狂熱の夏よりも強く。
おまえのうちに住む未知の神は、
シベールの知らぬ秘密を潜めた魅力に満ち
人の心のひだに巣くう しなやかな蛇の飼い主となる。
おまえの血も、肉も、青ざめた海洋や悲しげな森の
共犯者ではもはやない。
おまえのからだはもう アチスの耳をふさぐ
樹液の打ち返す潮には従わない。
瘦せて固いその子供のからだは 別の逸楽を知っている。
別の破壊を、肉体の深淵からもぎとった波よりも
よりよい死を 知っているのだ。
最後の日、このシベールに混じりあった体、
海に眠る無数の死者たちは、
あらそってわたしの開く脇腹から外へ飛び出すだろう。
永遠の夜の闇に早くも曇る眼で、
わたしは見るだろう、わたしの砂漠がつきる境を、
彼らの燃える頬のうえに 壮麗な暁の光が
血とともにのぼってさらにわたしの目をくらませるのを。
わたしの永遠の部分はアチスとともに残る。

死を免れるためにこそ はかない命のシベールは
おまえたちの葬られた体と密に結び合うのだ。
数かぎりないアチスたちよ！ おまえたちはわたしの塵だ、
塵に過ぎぬ、だが蘇るのはおまえたちだ。
おまえたちの髪の毛から 匂い立つ森は生まれ
いつまでもおまえたちの眼のなかに わたしの光は眠るだろう。
水面を赤く染めるわたしの暁、わたしの落日は
“小羊”にひたと向けたおまえたちの眼差しのかなかに燃える。
その心がつながれる海の静けさは
すでに与えられたあの“平和”と変じて行く。
かつては渚に残骸を打ち上げさせた
わたしの憤怒、海鳴りのあえぎ、
吹くその息は 傷つく松から慟哭を引き出したものだが
これより後は永遠に おまえたちの胸をふくらませるために吹こう、
額を上げて、おまえたちが、“子”をその目にみつめるとき¹²⁾。

以上で簡単だが「アチスの血」の紹介を終わりたい。

さて、この詩が何を主題としているか、何を表現しているか、作者の意図と、用いられた言葉や素材がどう関わっているか、といった問題はこの際あとに廻して、ひとつだけ指摘しておきたいのは、これがモーリヤックの内部に存在する「異教的なもの」を、小説作品よりも明瞭に、直截に表しているということである。

勿論そこにはキリストのもとに至るアチスがうたわれている。その意味でこの詩の主題はアチスである。しかし、見たとおり、作者はアチスに自己を同化させるよりはるかに多く、シベールに自己を託している。アチスにしても、大地であり空であり雨であるシベールの懷に抱かれ、土から立ちのぼる熱と匂いに酔いしれていたときには自ら語り出すことが多かつ

た。しかし松に変身してからその口は全く閉ざされ、アチスの内面は一切語られなくなる。「恩寵に満たされたアチス」までもが、シベールによって語られ、描写されることを記憶にとどめる必要がある。

作者はこの詩にあってはキリスト者アチスではなく、異教の神々の母シベールを深く自己のうちに内在せしめているのである。

「小説論⁽³⁾」や「小説家とその作中人物⁽⁴⁾」に展開されたモーリヤックの小説作法はパスカルをモデルとし、「神なき人間の悲惨」の陰画をもって「恩寵」の光明を暗示する、というものであった。しかし、この「神なき」世界は「悲惨」であるよりもかえってひそかな官能の愉楽を秘めた「豊饒」の趣を持っていた。禁欲的なキリスト教的理想像よりも、肉欲の人間の現実を追うことに作者の筆は冴えたのである。それは要するに、キリスト教的であるとほぼ拮抗してこの作家のなかに「異教的」要素が存在し、それがあらゆる作品の源泉となっているということにほかならない。ジイドの次の言葉はまさにそのことを指摘していたのであった。

「あなたの小説はキリスト教徒に、地上には天とは違ったものがあることを想起させるのに適しています。⁽⁵⁾」

「天とは違ったもの」……『アチスの血』はこの作家のうちに潜む「異教」が自ら語り出した作品である。モーリヤックの内部世界を知るための類い稀な考察資料と言えるのはそのためにほかならない。

(第一章終)

註

- (1) Il faut fermer les yeux, Cybèle, ou que tu partes !
Tu souffres trop. La main de Sangaris écarte
Sur le front du berger les sauvages cheveux,
Et le vol titubant de sa petite bouche
Erre sans se poser sur un visage en feu.
Tu subis les soupirs jaillis de cette couche

- Et ces cris insultant ton ombre et ton azur. (p. 456)
- (2) Mais tu sais que ce feu qui brûle les planètes
Meurt parfois au secret des humains et des bêtes,
Tu sais que le plaisir éteint les corps impurs,
Qu'Atys sort confondu de sa propre dérouté
Et qu'enfin remonté de l'abîme, il écoute
Les coups sourds de son cœur sous le pelage obscur. (p. 456)
- (3) Atys repu dans les ajoncs s'ouvre une voie.
Il s'y déchire, il fuit une nymphe qui pleure.
Chaude et grondante au loin, Cybèle attend son heure
Et rôde autour d'Atys détaché de sa proie.
Cet azur trouble encor où l'âme reprend vie
Est un ciel tourmenté que le vent purifie.
Mais sous les cils toujours sommeille une eau confuse,
Dort un secret d'ardeur, de fatigue et de ruse. (p. 456)
- (4) Trop longtemps j'ai souffert de dénouer l'étreinte
Où votre humanité goûte une brève mort.
Pour un embrassement libre de toute crainte,
J'ai fait de toi cet Arbre, et je suis sans remords!

- J'ai feint d'être jalouse, Atys, et je me flatte
D'avoir d'un faux-semblant joué les dieux du ciel,
Pour que, grand arbre humain, chaud de sève écarlate,
La résine à ton flanc coule comme le miel. (p. 457)
- (5) Un jeune pin tendu vers l'essence divine
Fait des signes au ciel avec ses longues mains.
Sa cime cherche un dieu, mais ses lentes racines
Dans mon corps ténébreux creusent de lents chemins. (p. 457)
- (6) Livre en vain tes cheveux à tous les vents du monde !
Tends tes branches au dieu que tu voudrais saisir !
Rien, rien n'arrachera ta racine profonde
A mon immense corps engourdi de plaisir. (p. 457)
- (7) Mais, brève éternité dont Cybèle s'enchanté,
Toute étreinte a fini quand les dieux l'ont voulu.
Homme, arbre, sève ou sang ou résine gluante,
Un jour, fleuve brûlant, tu ne couleras plus.

Jusqu'à la fin des temps, il faudra que je porte
Atys debout, rongé d'essaims et de fourmis.

Tes racines seront la chevelure morte,
Les serpents sur mon cœur à jamais endormis.

Reptiles embaumés que rien ne putréfie,
Au cadavre d'Atys ils emmêlent mon sort:
Je tends cet arbre mort aux dieux que je défie.
Je me ramasse toute autour d'un arbre mort.

Mes vignes, mes forêts et mes sillons avides
Jaillissent en rayons de ce corps calciné.
Les astres, dans leur nuit cherchant ce gibet vide,
Comme un troupeau de dieux ont vers lui cheminé.

Et seule, je ne sais, noire colonne, ô pâtre,
Doux arbre humain qui fus de feuilles frémissant,
Sur ton cadavre nu, quel aigle va s'abattre,
S'agripper à l'écorce et te couvrir de sang... (p. 457~p. 458)

- (8) Cette écorce où je crus t'enfermer, tu l'as fuie.
Enfant dont j'avais fait cet arbre, je te vois,
Gracile, resurgir des ténèbres du bois.
Sur ton épaule brille une goutte de pluie,
Mon sable vainement s'ouvre sous tes pieds nus,
En vain ce corps si doux se recouvre d'écailles
Et saigne, jeune pin, par de longues entailles,
Je vois réapparaître un Atys inconnu
Du sombre de ces bois où chaque pin recèle
Un Atys endormi qui me fut infidèle.
Et chaque fois l'enfant qui me suit d'âge en âge
Revient et, me fixant d'un œil pur et sauvage,
Attend de moi l'aveu de son propre secret. (p. 458~p. 459)

- (9) Les pins que j'ai chéris redeviennent des torses
D'adolescents cruels et d'enfants immolés
Qui s'écroulent sur moi, l'un à l'autre accolés,
Dans le parfum du sang et l'odeur de l'écorce.
Leur bouche déjà morte et leurs doux flancs ouverts
Me cherchent tour à tour sans que je les confonde.
O seins chastes d'Atys, ô poitrine inféconde
Purs espaces du corps frémissants et déserts,
Impénétrable cœur qu'une flèche traverse,

- O cuisses qu'écorchaient les ronces et les houx,
 Devrai-je boire au fleuve pourpre né de vous,
 Moi qui n'eus jamais soif que du froid des averses ? (p. 459)
- (10) Mais un dernier venu se coucha sur Cybèle,
 Il ne murmura pas le nom d'une mortelle
 Ni ses mains ne cherchaient l'ombre d'un corps absent.
 Tranquille et pur coulait ce flot de jeune sang.
 Tout désir avait fui de la grappe écrasée
 Entre le corps obscur et la terre embrasée.
 C'était le même enfant, c'était un autre Atys
 Que chacun de ces pins dans l'azur assoupis.
 Un Dieu souffrait au cœur de cet être éphémère,
 Dans ce torse tigré par l'ombre des fougères
 Et que le sol durci brûlait de sa touffeur,
 Un Dieu couvert de sang dont Cybèle avait peur. (p. 460)
- (11) Je n'ose m'approcher de l'enfant, dit Cybèle.
 J'aime les corps mais non les âmes immortelles.
 La Grâce de son Dieu le couvre comme une eau.
 Dans la limpidité de cet Atys nouveau
 Il ne subsiste rien de toi que je connaisse:
 Tes boucles, ton front bas ni tes lèvres épaisses,
 Tendre Atys phrygien qu'aux neiges de l'Ida
 Dans cette aube des dieux Cybèle posséda,
 Cœur double rejeté par la mer des vieux âges,
 Doux être féminin dans un mâle exilé
 Qui, pour atteindre enfin l'impossible partage,
 Te déchiras la chair, d'un silex affilé.
 La terre sèche but, lourdes gouttes d'orage,
 Le sang noir que perdait l'éphèbe mutilé.
 Les ménades couraient sur sa trace vermeille
 Avec des rires fous et des appels de ses dents
 La sombre grappe humaine arrachée à la treille.
 Dans le sable que tu souillais, sous un ciel bas,
 Pauvre cœur, tu fuyais malgré ta plaie immonde.
 Les enfants des pêcheurs menaçaient de leur fronde
 Ta chair blessée à mort et qui ne mourait pas,
 Tu fuyais, ignorant qu'à chacun de tes pas,
 Le sang trouble d'Atys ensemençait le monde. (p. 460~461)
- (12) Je ne reconnais pas cet Atys que tu fus.

Ton Dieu t'a délivré du monstre vil et tendre
Dont tu n'as rien gardé que ce qu'il faut de cendre
Pour recouvrir un feu qui ne s'éteindra plus.
Et moi, Cybèle, autour du cœur où ce feu couvre,
J'hésite gémissante et rôde à pas de louve,
Je pleure de te voir si frêle et si puissant.
Dors-tu ? L'herbe où tu dors te souille de sa rêve.
Un oiseau s'interrompt de chanter comme en rêve.
Une cigale bat et s'accorde à ton sang.
Du pays de la mer où brûlent les pinèdes
Le vent du sud qui meurt dans les tilleuls flétris
T'apporte le parfum du corps de Sangaris,
Rivale que je hais, que j'appelle à mon aide.
Pour te livrer en songe à ce que tu chéris
J'ai sur toi de ce jour refermé la fournaise...
Mais en vain ! Les genoux salis d'un peu de glaise,
Tu te dresse, plus fort que l'été délirant.
Je n'eusse jamais cru qu'Atys était si grand !
L'Inconnu qui l'habite a, pour se rendre maître
Du doux serpent lové dans le repli d'un être,
Des charmes dont Cybèle ignore le secret.
De l'océan livide et des tristes forêts
Ni ton sang, ni ta chair ne demeurent complices:
Ton cœur n'obéit plus au flux ni au reflux,
A la sève qui sourd Atys n'obéit plus.
Cet enfant maigre et dur connaît d'autres délices,
Un autre brisement, une meilleure mort,
Que la vague arrachée à l'abîme d'un corps.

Au dernier jour, ces corps confondus en Cybèle,
Les milliards de morts qui dorment dans la mer,
Se précipiteront hors de mon flanc ouvert.
L'œil obscurci déjà par la nuit éternelle,
Je verrai, des confins de mon dernier désert,
Sur leur joue embrasée une adolable aurore
Monter avec le sang et m'éblouir encore.
Ma part d'éternité demeure avec Atys.
C'est pour ne pas mourir que Cybèle éphémère
Épouse étroitement vos corps ensevelis,

Innombrables Atys! Vous êtes ma poussière,
Ma poussière, c'est vous qui ressuscitez.
De vos cheveux naîtront d'odorantes forêts
Et toujours dans vos yeux dormira ma lumière.
Mes aubes, mes couchants qui rougissaient les eaux,
Brûlent dans vos regards attachés sur l'Agneau.
Le calme de la mer à vos cœurs enchaînée
Se mue en cette Paix qu'il vous avait donnée.
Mes fureurs qui jonchaient les plages de débris
Et ce halètement de la houle marine
Dont le souffle arrachait aux pins blessés des cris,
De tout temps à jamais gonflent votre poitrine
Lorsque, le front levé, vous contemplez la Fils. (p. 161~p. 163)

(13) 《Le Roman》 1928

(14) 《Le Romancier et ses personnages》 1933

(15) 中島公子《Gide-Mauriac 往復書簡について (VII)》明治大学教養論集171 p.41

(なかじま・こうこ 農学部教授)